



平成28年度

東京都広報コンクール 実施結果

平成29年3月23日



東京都

目次

- 平成28年度東京都広報コンクール実施状況 p.3
- 平成28年度東京都広報コンクール審査委員名簿 p.4
- 平成28年度東京都広報コンクール入選作品一覧 p.5
- 広報紙部門
 - 広報紙部門 総評 p.7
 - 広報紙部門 入選作品紹介 p.9
- 写真部門（一枚写真の部・組み写真の部）
 - 写真部門 総評 p.18
 - 一枚写真部門 入選作品紹介 p.20
 - 組み写真部門 入選作品紹介 p.31
- 映像部門
 - 映像部門 総評 p.36
 - 映像部門 入選作品紹介 p.38

平成28年度東京都広報コンクール実施状況

区市町村の広報力の向上と、都と区市町村との連携による広報活動の充実を図ることを目的に、平成28年度東京都広報コンクールを下記のとおり実施した。

1 応募状況

(1) 応募作品数

部門	応募作品数（今年度）	応募作品数（昨年度）
広報紙部門	41	40
一枚写真部門	26	22
組み写真部門	17	15
映像部門	23	19
応募総数	107	96

(2) 応募区市町村数

今年度 44区市町村（22区・19市・3町）

※昨年度 42区市町村（22区・17市・3町）

2 審査会

平成29年1月23日、25日及び28日

東京都庁舎内会議室

3 審査委員

「平成28年度東京都広報コンクール審査委員名簿」のとおり

4 審査結果

「平成28年度東京都広報コンクール入選作品一覧」のとおり

なお、（社）日本広報協会「全国広報コンクール応募要領」の応募基準に該当する各部門の上位の作品については、「平成29年全国広報コンクール」に東京都推薦作品として応募する。

5 表彰式

日時：平成29年3月23日（木曜日）14：30～

会場：都庁第一本庁舎25階 103会議室

※平成28年度第3回「東京都広報セミナー」を同時開催

平成28年度東京都広報コンクール審査委員名簿

部門	氏名	現職等	専門分野
広報紙	大井 眞二	日本大学法学部新聞学科教授	マス・コミュニケーション論等
	長岡 光弘	グラフィックデザイナー	広報紙のレイアウト編集等
写真	大石 芳野	(社)日本写真家協会会員 フォト・ジャーナリスト	写真一般
	板橋 秀樹	東京都生活文化局 広報広聴部広報課課長代理 (写真担当)	行政広報写真等
映像	関 裕敏	(株)電通 第4CRプランニング局 専任局長	広告企画・制作
	高橋 幸作	(株)NHKエデュケーショナル 特集文化部統括プロデューサー	映像企画・制作

平成28年度東京都広報コンクール入選作品一覧

部門	作品数内訳	賞	区市町村名	作品名	全国推薦
1 広報紙 (41)	(1) 区市部 (21区18市)	最優秀	渋谷区	「しぶや区ニュース」7月1日号	○
		一席	豊島区	「広報としま特集版」11月1日号	○
	(2) 町村部 (2町)	二席	小平市	「市報こだいら」5月20日号	
		奨励賞	板橋区	「広報いたばし」魅力特集版9月3日号	
2 写真 (43)	(1) 一枚 写真の部 (13区10市 3町)	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」11月15日号	○
		一席	板橋区	「広報いたばし」魅力特集版4月7日号	
		二席	港区	「広報みなと」9月1日号	
			福生市	「広報ふっさ」1月4日号	
		奨励賞	瑞穂町	「広報みずほ」10月1日号	
	(2) 組み 写真の部 (10区5市 2町)	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」9月1日号	○
		一席	足立区	「あだち広報」9月10日号	
		二席	該当なし		
3 映像 (23)	(19区4市)	最優秀	品川区	「いま聞いておきたい！あの日の記憶 壊滅した商店街と満蒙開拓団」	○
		一席	豊島区	「THE としま遺産 3つの国重要文化財」	
		二席	江戸川区	「巨大台風の脅威に備える ～江東5区大規模水害避難等対応方針～」	
			日野市	「日野市文化財シリーズ『刀剣』」	

*奨励賞・・・作品の質もさることながら、取材テーマ選定や日頃の広報活動に対して、今後への期待や応援の意味を込めて授与する賞

*表中（ ）内の数字は応募作品数。

*全国推薦は、入選作品のうち、全国広報コンクール応募要領の応募基準に該当する各部門の上位作品とする。

広報紙部門

- 総評 p. 7
- 最優秀作品紹介 p. 9
- 第一席作品紹介 p. 1 1
- 第二席作品紹介 p. 1 3
- 奨励賞作品紹介 p. 1 5

●大井委員

先ず、本年度の応募作品の全体の印象について述べると、昨年と比べ高く評価することのできる作品が非常に多かった。企画の問題意識の高さや、テーマへの適切なアプローチはもちろんのこと、読み易さ、分かり易さ、そして利用のし易さに心を砕いて、編集された作品が目立った。住民になじみのない行政用語は姿を消し、読み手の立場に立って、編集制作されていることが十分伺えるだけでなく、その成果が明確に紙面に示されている作品が多かった。図や表、アイコンなどを巧みに使い、なかなか理解しにくい問題をかみ砕いて説明する。平易な語句を使う。ご苦心の程がしのばれるのである。

広報紙は様々な役割を担う。自治体は、伝えなければならない情報から、伝えておくべき情報、伝えておいた方が良い情報に至るまで、様々な情報を抱えている。それらの情報の価値・意義を吟味し、それに従った情報提供を心掛けることが大事である。いうまでもなく提供すべきは情報に限らず、住民の参加を促すような議論の提供も、複雑な利害が絡む問題について多角的な視点の提供も重要である。自治体の基本的な施策を理解してもらうだけでなく、支持・協力をもたらすような取り組みが必要である。

パブリック・リレーションズはパブリック・コミュニケーションの一部であり、パブリック・コミュニケーションはパブリック・リレーションズ(PR)を捉える研究の枠組みとして重要である。パブリック・コミュニケーションとしてのPRについて、重要なアプローチが三つある。一つはコミュニケーションのアカウンタビリティである。説明責任と訳されるのが普通であるが、どうも結果について説明すれば責任が果たされる、と安易に解されている場合が多い。本来のコミュニケーションのアカウンタビリティは、結果についての説明責任だけでなく、行政過程全般に関わるものと理解されるべきである。過程を重要視することは、第二のコミュニケーションのトランスパレンシー(透明性)につながる。公表することによって多くの問題を惹起するような未成熟な情報を自治体が抱えていることは言うまでもないが、安易に判断するのではなく、多少の不都合は受忍限度と心得て、すべての行政過程全体についていかに透明性を確保できるか、ぎりぎりまで努力する。こうした努力は、かならず自治体経営にとって重要な資産となりうる、信頼性をもたらすことになるだろう。

第三、はコミュニケーションのインタラクティビティ(双方向性)である。これはソーシャルメディアのようなメディアにとって有効なアプローチであることは言うまでもないが、既存の紙媒体でも重要性はいささかも減じない。一方通行になりがちな媒体にどのようにしたら、有効適切なフィードバックのループを構築できるか、今一度真剣に考えてみるべきであろう。

こうしてみると、三つのアプローチは相互に密接に関連していることが、了解されるだろう。それぞれは固有の意義を持つことは言うまでもないが、相互に関連づけて、戦略的に広報を考えていけば、新たな広報の視座がうまれるであろう。そのためには、それぞれのアプローチを実行するとすれば、何が不足しているか、何が障害になっているか、を明らかにし、それを克服する努力が必要だろう。さらに、そこから、一層のアカウンタビリティを目指す試みが、行政過程の透明性をもたらすこと、アカウンタビリティと透明性を媒介しうるのが双方向性だ、といった見取り図も見えてくるだろう。

●長岡委員

広報紙の優位性を活かした 紙面企画と編集チャレンジに期待したい。

応募作の紙面を読むと、様々な情報にURLが表示され広報のハブメディアの機能を考慮した情報訴求が図られている。また、スマートフォン等に対応したQRコードの表示、視力障害者に対応した試みであるSPコード（読み上げ装置を用いて、文字情報を音声で聞くことができるコード）が表示され、住民に情報を容易に入手できる工夫を紙面から見る事が出来る。一方で、URL表示のみの紙面も数多く見受けられる。住民への利便性を考慮した表示に留意する事が望まれよう。

紙面企画及び編集で特筆する点は、告知型の企画が多い中で、住民との協働による紙面が見受けられる。その例が、住民がリポーターとして取材した記事、紙面の企画及び編集に住民が参画した紙面編集が挙げられる。また、職員が紙面に登場し、施策に係る情報を発信している紙面も見受けられ、広報紙が職員と住民とのコミュニケーションのハブメディアとなっている。加えて、住民が紙面に登場する企画も多く、住民の目を惹く紙面編集を多く目にした。進化する紙面企画と編集を感じる審査であった。

紙面表現では、写真を巧みに用いて視覚力のある表現が目につく。また、情報区分ごとに文字組及び色を変化させ、視覚的な情報区分が図られている。変化の飛んだ紙面表現を施した応募作を多く目にした。

一方、情報量が多く目移りする紙面表現も見受けられる。広報紙の紙面数にはコスト面を考慮すると限りがある。広報紙に掲載を要望する部署及び情報量も多くなる中で、読みやすい紙面にするためには、情報量をいかにセーブするかが広報担当者の悩みの一つと言えよう。多くの自治体では、紙面で訴求する情報をホームページでも掲載しているW広報が多く用いられている。重点施策を除いた他の情報は、情報の概要のみを掲載し情報の詳細はホームページをはじめとした他メディアに委ねる編集方法も、紙面に掲載する情報のセグメント方法の一つと言えよう。

広報紙は、住民が自らアクセスする必要があるホームページやSNS等とは異なり、全世帯に配布される。また、紙面の訴求情報の内容によってはセグメントしたターゲットは存在するものの、一方で、広報紙は様々な住民に情報が発信されている。広報紙は、様々な住民に向けて情報を発信する全方位型のメディアで、他の広報メディアとは異なる優位性を持ったメディアと言える。広報紙の優位性を活かした紙面企画と編集に、広報担当者の更なるチャレンジした試みに今後も期待したい。

最優秀（全国広報コンクール推薦）

区市町村名	渋谷区
広報紙名・掲載号	しぶや区ニュース 7月1日号
発行部数	166,000部
年間発行回数	24回
判型・平均ページ数	タブロイド判・12ページ
担当者数	4人（専任0人、兼任4人）
主な記事の掲載意図	渋谷区広報紙「しぶや区ニュース」では毎号、地域で活躍されている方をローカルスターとして紙面にご登場いただき、活動内容を紹介しています。今号では「コミュニティで豊かに育む、渋谷区の子育て」と題し、メインに渋谷区の子育て支援団体によるイベント「渋谷mamaマルシェ」の活動内容や主宰している方々を紹介し、サブでは渋谷区保育園の園庭の天然芝を手入れしている「しぶほしばふクラブ」を紹介し、渋谷区で仲間たちと学び合い、助け合い、楽しみながら子育てをしているママ・パパたちの活動を掲載しました。さらに12面には子育て支援センターを特集し、ママ・パパ同士の交流の場を紹介しています。
審査委員コメント	●「渋谷区ニュース」では、ローカルスターを掘り起こし、毎号紙面に人物登場させているそうだが、企画の展開と拡張性が感じられるだけでなく、「mama マルシェ」子育て支援、交流の場、子育て支援センターなど多角的かつ立体的な組み合わせで、非常に魅力的な紙面に仕上がった。8、9面の暮らしの情報は、贅沢すぎるスペース使いに感嘆してしまう。（大井） ●テーマを絞り紙面が編集され、住民に訴求力のある広報紙である。また、紙面の至る所に住民が登場し、住民の目を惹く紙面である。地域で頑張っている団体・住民等を取り上げ、行政と住民との協働を感じる紙面である。紙面表現は、罫線を巧みに用いて情報区分が図られている。各情報には、イラスト・写真等が配置され視覚的な表現が施されている。文字情報量のボリュームも程よい。（長岡）

第一席（全国広報コンクール推薦）

区市町村名	豊島区
広報紙名・掲載号	広報としま特集版 11月1日号
発行部数	106,000部
年間発行回数	12回
判型・平均ページ数	タブロイド判 8ページ
担当者数	6人（専任6人）
主な記事の掲載意図	表紙と2・3面は「高齢者の居場所づくり」特集。一人暮らし高齢者の割合が高い本区では、高齢者の孤立をどう防ぐか、地域の支え合いの仕組みづくりが大きな課題になっている。「おたがいさまが合言葉。」のタイトルに、笑顔で語り合う高齢者の明るい写真を表紙全面に配し、まずは手に取ってもらえるよう、親しみやすい雰囲気を出した。続く2・3面では、区主催の認知症カフェと区民主催のサロンを実際に取材し、様々な居場所があることを紹介するとともに、区民の思いや、利用者の生の声を掲載することで、「高齢者の支え合い」を身近に感じてもらえる内容とした。とすると深刻になりがちなテーマだが、あえて明るい色使いで楽しい紙面づくりを心がけた。 4・5面は「身近な国際交流」をテーマに留学生と彼らを支援する人々の双方を取材し、外国人に対する苦手意識を和らげ、多文化共生を考えてもらうきっかけとなる内容とした。あわせて気軽に参加できる国際交流事業を紹介したところ、定員を超える応募があった。さらに、区ホームページで新たに公開した「外国人のための生活インフォメーション」や多言語で翻訳している観光情報ページを紹介し、広報紙とホームページの連携を図った。
審査委員コメント	●表紙と2、3面の特集「高齢者の居場所づくり」の特集は、登場人物の魅力もあって読み応えのある企画となった。楽しい紙面づくりに思わず引き込まれてしまう。こうしたアプローチはやや深刻になりがちで、尻込みされるような問題にとって効果的だ。他方で、8面の「持続発展都市へ向けて…」はやや表現が堅く、読み易さにかける。もう一工夫が必要ではないか。（大井） ●高齢者の居場所を取り上げた特集は、1～3面にかけて住民の元気な笑顔写真を掲載し、住民の目を惹く紙面である。区主催のカフェ及びサロンの紹介、利用者及び主催者等のインタビュー記事など、訴求情報を住民に楽しく読んで頂く編集工夫が施されている。4～5面は、外国人と住民が紙面に登場し、区の外国人の支援姿勢が住民に伝わる編集である。見る・読むのバランスが優れた広報紙である。（長岡）

第二席

区市町村名	小平市
広報紙名・掲載号	市報こだいら 5月20日号
発行部数	72,500部
年間発行回数	年24回（ほか特集号8本程度）
判型・平均ページ数	タブロイド判 8ページ
担当者数	2人（専任1人、兼任1人）
主な記事の掲載意図	●1面、市報ロゴタイトル右の市キャラクターイラストは、年間発行の24号すべて違うものにし、季節感を演出している。また、携帯電話やスマートフォンから市報を読む方のため、QRコードを常時掲載している。 ●1面は、紙面の表紙であり、読み手に興味を引かせるトビウであるため、特集記事にしている。また、単に記事を大きくするのではなく、内容が伝わるような写真、特に人の表情が見える写真を掲載するように心がけている。それとともに、特集記事に関係する市民の声を掲載することで、双方向性を持つようにしている。 本号では、18歳に選挙年齢が引き下げられたことをテーマに、高校で行われた模擬投票の授業と絡めて、18歳になる高校生が感じた疑問・感想を載せることで、初めて選挙権を持つ18歳の方々の不安をなくし、投票につなげる記事としている。 ●8面では、市民の活躍やイベントを大きな写真付きで紹介するフォトニュースのコーナーを設け、その場の雰囲気や臨場感が伝わるように心がけている。 ●新聞形式を重んじ、縦書きを基本としている。中学生程度でも理解できる分かりやすい表現、図解化や表形式での表記を心がけ、漢字表記については「NHK漢字表記辞典」に準拠している。またイラストを使用する際は、車いすや高齢者・子どもを多用し、市民全体に意図がいきわたるよう心がけている。限られた紙面の中で、目的の記事が探しやすいようにカットや色アミを配置するなどの工夫をしている。
審査委員コメント	●1面の「始まる。18歳選挙」と6、7面の選挙に関連する紙面展開は、18歳への選挙年齢引き下げについてある種のシミュレーション、参加を促す仕掛けが施されており、対象読者の手に渡れば、面白がって読まれたであろう。この話題はマスメディアでも大きく取り上げられたが、模擬授業など、インタラクティブな試みが効果的だ。（大井） ●1面は、学生の写真を大きく表現し、大胆に表現された見出しと共に住民の目を惹く表紙である。関連情報への誘導文も掲載され、情報の扉紙面も担っている。5～8面は、写真と4色を活かした紙面表現が施されている。また、力強い表現が、住民に対して訴求力のある紙面である。訴求情報も、要点を語った編集が施され、情報が伝わる紙面である。各紙面、表現及び編集のバランスが取れている。（長岡）

奨励賞

区市町村名	板橋区
広報紙名・掲載号	広報いたばし 9月3日号
発行部数	195,000 部
年間発行回数	年間47回
判型・平均ページ数	タブロイド判 4または8ページ
担当者数	5人（専任5人）
主な記事の掲載意図	主な内容は、板橋区立美術館の特別展示である「よりぬき長谷川町子展」の開催案内となっています。サザエさん生誕70年を記念し、老若男女問わず国民的な人気のある漫画「サザエさん」に関する掘り下げた展示内容となっています。親しみのあるイラストや画像を駆使し、区民の方に興味を引くよう紙面づくりを試みています。さらに、紙面を開くと向きを変え、かわら版をイメージした縦組みでの構成となっており、見た方の意外性・驚き・斬新性を狙ったものとなっており、「広報いたばし」ではこのような編集を初めて行いました。 また、この展示会をきっかけに、区立美術館の案内や今後の展示会情報も盛り込み、施設のPRや芸術や地域文化を紹介することで、区民の方の芸術・文化振興の気運醸成を行っていききたいという編集者の意図もあります。 なお、美術館周辺である赤塚地域には、郷土資料館や赤塚植物園など観光スポットを気軽に巡ることができるコミュニティバス「りんりんGO」の案内も4面で取り上げました。
審査委員コメント	●応募作は「月刊特集版」と題するもので、「よりぬき長谷川町子展」の開催案内ながら、新しい視点からの文化的資源を見直し、それを広報での企画化する、といった連携と連動の試みは非常に読み応えがある。関連する掘り下げた企画、美術館などの文化情報の提供も加わって、非常に魅力的な作品に仕上がった。（大井） ●美術館の催事紙面は、1面に黄色い地色とキャラクターを配置し、インパクトのある紙面デザインである。また、2～3面は、紙面の向きを変えブランケット版の新聞表現が用いられている。住民の視線を集める紙面である。記事情報もキャラクターの誕生秘話が掲載され、催事の魅力が住民に伝わる編集である。4面は、視覚的な情報区分が図られ、情報の混乱は招かない表現である。（長岡）

写真部門

- 総評 p. 1 8
- 一枚写真の部 p. 1 9
- 組み写真の部 p. 1 1

<写真部門 総評>

●大石委員

写真そのものの質という点では、今回はレベルの高い作品群だった。もちろん、カメラの性能やプリントアウト技術の発達もあると思うが、一目見て「良い」と思える作品が多くなってきているのは事実である。その一方で、イメージ写真ではなく、行政の広報写真と考えると、多少メッセージ性が欲しいものも少なくなかった。いきなり撮影するのではなく、背景にある撮影意図を前面に出す手法を考えてからシャッターを切る姿勢が求められる。

レイアウトの面では、写真単体の質が良いほど、紙面での扱いに注意が必要になる。写真の良さを消してしまわないように、慎重に掲載サイズ・レイアウト等を練る必要があるからである。もちろん、そのためには、写真と広報紙を一体のものとして捉える、総合的なデザイン意識が必要なことも忘れてはならない。

今回審査していてもう一つ気になったことは、毎回上位に食い込む自治体と、そうでない自治体とのレベル差が開き気味なのではないか、ということである。毎回自信作を応募しているのに・・・という担当者の方は、予め行政として発信したいメッセージを整理し、広報紙全体の一部として写真を考えてみると良いと思う。紙面全体と調和した、強力なメッセージ性を持った広報写真の応募を楽しみにしている。

●板橋委員

撮影機器の性能が良くなっていることもあり、年々写真の質が向上しています。1枚1枚コンセプトを決め、その内容を伝えるために撮影位置等、構図にも工夫が見られます。写真としては良くなっているのですが、紙面レイアウトにより、写真の良さが失われてしまっている作品が多く感じられます。限りある掲載スペースを有効に使って、出来る限り写真を大きく、また、写真に被せる文字を可能な限り少なくして元写真の良さを生かしていただきたいと思います。近年被写体に文字カードを持たせて伝えようとする写真も多く見受けられます。アイデアとしては良いのですが、このような「コンテスト」においては文字に頼るのではなく、写真だけの力で伝えることの出来る作品が高く評価される傾向にあります。今後も住民の心に響く写真で、効果的な紙面レイアウトの作品を期待しています。

組み写真については喜ばしいことに、年々良い作品が増えてきました。しかし、記事、あるいはキャプション等の補足として、複数の写真を掲載しただけの作品が多いことも事実です。写真自体の質は向上しているのですが、「組み写真」は、数枚の写真の構成でメッセージを伝える技法です。レイアウトも大事です。記事、キャプション等は出来るだけ少なくしたいですね。広報誌は「お知らせ」、「告知板」等、文字情報が多くなりがちです。「組み写真」を利用して、効果的に住民にメッセージを伝える紙面を目指して下さい。

写真部門 一枚写真の部

- 最優秀作品紹介 p. 2 0
- 第一席作品紹介 p. 2 2
- 第二席作品紹介 p. 2 4
- 奨励賞作品紹介 p. 2 8

最優秀（全国広報コンクール推薦）

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 11月15日号
掲載意図	八王子市の東南部、大栗川の周辺地域の住民の方々が交流を目的に開催している「キャンドルリバー」での1枚。紙コップで作ったキャンドルに、一つひとつ灯を入れて回るようす。 あたたかいふれあいが表現できればと思い、ほのかな光に照らされる親子の笑顔を撮影した。徐々に日が暮れると、約3万個のキャンドルによる幻想的な風景が浮かび上がった。
審査委員コメント	●元写真の構図を活かす形で紙面レイアウトが組まれており、総じて調和のとれた作品。夜空の色とキャンドルの柔らかい光が良い対比になっており、撮影技術的にも秀逸。（大石） ●キャンドルに親子で一緒に灯をともしています。表情もいいですね。「広報はちおうじ」の写真は安定感があります。元写真の空の深い青、キャンドルの光に照らされた親子の表情など、とても印象的です。紙面上では印刷の関係上、この色合いが再現できていないのが残念です。また、左側のキャンドルの奥行き感と手前のキャンドルを生かした紙面レイアウトを希望します。（板橋）

広報 はちおうじ Hachioji

11.15
2016(平成28年)
No. 1363

やさしい灯りに
あか
想いをつなげて

10月22日に開催された「大瀬川」キャンドルリバー。約3万個の
手づくりのキャンドルに、地域の皆さんが一つひとつ灯を入れた。
幻想的な光景の中、ゆったりとした時間が流れていました。



百年の彩りを 次の100年の輝きへ

第一席

区市町村名	板橋区
広報紙名・掲載号	広報いたばし 4月2日号
掲載意図	広報いたばし4月2日号（魅力特集版）では、ゴールデンウィークを前に、区内に300か所以上ある公園の中から、特色ある公園を紹介することにしました。 紙面のテーマは「子どもの笑顔がたくさん見られる公園」です。 今回の応募写真は、第1面の写真で、区内に動物とふれあえる公園があることを知っていただくためにインパクトのある馬（ポニー）と、それに初めて乗る女の子の表情で、温かみがあり、楽しさが伝わる写真を掲載しました。 最初は初めて見るポニーに緊張していた女の子でしたが、周回を重ねていくうちに笑顔も出るようになり、自然な表情を撮影することができました。
審査委員コメント	●初めて馬に乗れた喜びが、自然な表情であらわれている。この公園には、こういった子供の笑顔があふれているのだろうと、温かい気持ちになる。元の写真に写っていたハトがアクセントになっていたのも、広報紙では消えているのが残念。（大石） ●テーマの「子どもの笑顔がたくさん見られる公園」にピッタリの作品ですね。女の子の笑顔が印象的です。元写真では、曇りの日なのか全体的に青みが強いのですが、紙面上ではいい感じに補正されています。写真上のテキストも最小限に抑えられていて、写真を生かしたデザインになっています。欲を言えば、ポニーが女の子と同じ方向を向いていると更に目を引く写真になったと思います。（板橋）

広報
No. 2246

ITABASHI

月刊
魅力特集版

第14巻第4号

4月号

平成25年・2013年



発行/印刷所 編集/公民館協議 〒173-8501 新郷区新郷3-65-1 PAX 3579-2008(広報広聴課) <http://www.city.itabashi.tokyo.jp/>

区報発行所 ☎ 3964-1111



はじめて
お馬さんに
のりました

たのしい
が
いっぱい!

いたばしの公園

こども動物園

第二席

区市町村名	港区
広報紙名・掲載号	広報みなと 9月1日号
掲載意図	広報みなとは、毎月3回発行しており、毎月1日号では、区内各地区のスポットを掲載しています。 有名な観光スポットではなく、日常の一部となっている場所を中心に、区内を知りつくしている広報担当の視点で選定しています。港区に長く住んでいる人には「新たな発見を感じてもらえるよう」、また新しい住民には「観光スポット以外にも魅力的な場所を知ってもらえるよう」、紙面を大きく使える縦構図で切り取り紹介しています。 9月1日号で紹介した「お台場海浜公園からの夕景」は、限られた時間にしか見るができないお台場海浜公園からの美しい夕景を掲載し、「新旧の住民、子どもから高齢者まで、お台場の新しい楽しみ方を知ってもらいたい」という思いを込めて、多くの人の関心を引くよう、構図や撮影時間を工夫しました。 都会にある海であるということを伝えるため、レインボーブリッジの先にあるビル群も悠々と写りこむように、撮影場所を探しました。また、この夕景の色を伝えるために、撮影当日は、日の入りギリギリまで粘りました。 夕景を見るためにお台場を訪れることは、普段の生活ではなかなか難しいためか、有名な観光スポットではありますが、珍しい景色と感じてもらえたようで、駅や区有施設のラックに置いた広報紙は、他の号より、手に取る人が多かったです。
審査委員コメント	●きれいな夕焼けが取れていて、撮影者の技量を感じる。風景写真としては言う事なしだが、第三者にとって「行ってみたくなる・住んでみたくなる」という趣旨がより強くなると良い。（大石） ●綺麗な夕景ですね。シルエットの子供たちも良いアクセントになっています。広報誌は地域の方のみならず、地域外の方たちにも地域の魅力の発信が必要です。この場所に行ってみたくなる作品です。紙面上でも写真の上にテキスト等を最小限に抑えていることも、この写真を引き立てていると思います。これは好みの問題になるかもしれませんが、カメラ位置を若干低くして、シルエットの子供たちを海面の反射に被せると更に印象的な写真になると思います。（板橋）



No.1989

みなと

平成28年
(2016年)

9.1

<http://www.city.minato.tokyo.jp>☎ 3578-2111
(区役所代表)
FAX 3578-2034
(区庁舎内郵便)

各課・支所・分室連絡先

〒地区 ☎3578-3111
〒地区 ☎3583-4151〒地区 ☎5413-7011
〒地区 ☎5421-7811
〒地区 ☎3458-4151
台 場 分 室 ☎5500-2365

発行/港区 毎月1・11・21日 発行部数120,000部 編集/企画経営部広報課 〒105-8511 港区芝公園1-5-25

熱中症予防と節電のお願い

一人ひとりの節電行動が大きな成果につながります。熱中症にならないよう、エアコンや扇風機等を上手に利用して、無理のない範囲で節電にご協力ください。



お台場海浜公園では、美しい夕景を鑑めることができます。海風にあたりながら、ゆっくりと、1日を振り返ってみてはいかがでしょうか。

区の手続きや施設・催し物のご案内は **みなとコール** ☎5472-3710 FAX5777-8752 年中無休 午前7時～午後11時

※「広報みなと」は新聞(朝日・読売・毎日・日本経済・産経・東京)折り込みです。区の施設や、郵便局(原宿・三軒茶屋・目黒・芝・芝公園・新橋・有明)、公民館、区内のJR・地下鉄・ゆりかもめの駅、新聞販売店等に置いてある他、希望する区民の皆さんに配布しています。また、「広報みなと」、「民の広報」も発行していますので、ご利用ください。

「広報みなと」は、港区ホームページ(<http://www.city.minato.tokyo.jp>)でもご覧いただけます。

第二席

区市町村名	福生市
広報紙名・掲載号	広報ふっさ 1月4日号
掲載意図	西多摩地域の伝統的な正月の飾り物である「ミキノクチ」の製作技術が失われつつあるなか、それを引き継いでいる「人と想い」を写真で伝えたいと思ったため。
審査委員コメント	●雑然とした背景が臨場感を感じさせる。職人の手元を見たいので、そこも映っている構図だとなお良かった。写真を生かす工夫としては、見せたいものを右下に置く手法もありうる。（大石） ●伝統工芸の職人さん、絵になりますね。写真ではローアングルから職人さんの表情を捉えています。工具、材料の棚が背景になっていることで臨場感がでています。若干、物足りなさを感じるのは、職人さんの手元が隠れてしまってることです。職人さんの製作過程で手をひねる動作時など、少しでも手元が写っていると良いですね。紙面上のレイアウトですが、天井部分をカットして、「ミキノクチの作成風景・・・」の写真に対するテキストの占める割合を少なくすると、より写真が生きてくると思います。（板橋）

奨励賞

区市町村名	瑞穂町
広報紙名・掲載号	広報みずほ 10月1日号
掲載意図	東京みずほブランド。それは、瑞穂町の名産品や特産品、地域の魅力を伝える町の認定品。 今年度は新しい試みとして、町外から大学生を招き、東京みずほブランドの「魅力の再発見」に主眼を置き、大学生ならではの客観的かつ新しい目線を取り入れ、パンフレットを作成しました。 この写真は、大学生の取材に同行し、東京みずほブランドの中の「東京みずほトマト」を作るトマト農家の近藤さんが、大学生たちに普段の手入れの大変さや、トマトへの「こだわり」、「熱い想い」を伝えている瞬間を撮影しました。 本来であれば撮影した8月は、トマトの時期を終えています。近藤さんは、大学生のためにトマト畑を一部、取材用に残してくれていたのですが、残念なことに、撮影日は、台風9号が首都圏を直撃した3日後。瑞穂町にも、農作物などに被害を与えていました。この写真の反対側には、私が本来撮影しようとしていた近藤さんのトマト畑が広がっているはずでした。 そのような中、大学生が残念そうな近藤さんに「地域の魅力は人の魅力です。トマトが無くても、創り手の皆さんのこだわりや想いを届けて、みずほブランドのファンを1人でも増やしたい」と笑顔で話し掛けると、トマトへの想いが流れるように出てきた近藤さん。 台風一過の夏の青空をバックに、大学生と近藤さんの温かい取材のやり取りを、自然な雰囲気では表現できるように撮影しました。
審査委員コメント	●いかにも学生といった若者と農家というアンバランスさが目を引く。一見して意図が分かりづらかったが、撮影の背景を踏まえて見ると感動的であり、こうした事業をこれからも続けてほしいと強く思った。（大石） ●生産者と大学生、爽やかな笑顔ですね。良い表情を捉えています。笑顔が主体となる写真ですので、順光で撮影したいですね。顔に光が当たった方が笑顔が引き立つと思います。また、「みずほブランド」のパンフレット作成取材と言う事ですが、説明文を読まないどのようなシーンなのか分かりませんね。一枚写真の場合、写真のみで内容がわかるほうが良いと思います。紙面上では、顔の部分を補正して、表情がわかるようになっています。写真に乗せているテキストも最小限で、スッキリしたレイアウトですね。（板橋）

広報

みずほ

2016 10
No.657



大学生が「東京みずほブランド」認定品の生産者を取材!!

平成28年度版「東京みずほブランド」パンフレット作成に当たり、大学生たちが認定品の生産・製造者を取材しました。写真は、認定品「みずほトマト」を生産する農園にて、日本大学教育学部の高橋香織さん（左）、富士野誠也さん（右）が取材する様子です。普段の手入れの大変さや、東京みずほブランドとして愛されるトマトを栽培するコツなど、熱心に取材していました。
(関連記事：2ページ)

おもな内容

みずほ伝言板	10月23日付 連携町こどもフェスティバル 生地にしませんか ほか	2～6
福祉・子育て	納付金の受付を開始します 連携町子ども・子育て会議を開始します ほか	7～11
インフォメーション	町税などの納め忘れはありませんか シグラメンの町税種別表を載せておきますか ほか	14～16
教育委員会からのお知らせ	平成29年度 私立幼稚園入園額 豊配市 教育相談員の募集 ほか	17～20

写真部門 (組み写真の部)

○最優秀作品紹介 p. 3 1

○第一席作品紹介 p. 3 3

最優秀（全国広報コンクール推薦）

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 9月1日号
意図	関東屈指の山車まつり「八王子まつり」。山車を引く子どもたちの元気なかけ声や、甲州街道を練り歩く神輿など、活気あふれる見せ場の数々が、訪れた観衆を魅了する。本号では、八王子の夏を彩る祭人たちの生き生きとした「表情」にスポットを当てた。 太鼓を叩く女性の笑顔や、真剣に山車を先導する男の子の姿など、心躍る一瞬を掲載。 また、豪華絢爛な山車が囃子を競い合う「ぶっつけ」のようすを大きく配したレイアウトにすることで、祭りの熱気や祭人たちの躍動感を肌で感じられる紙面をめざした。
審査委員コメント	●メインの写真にインパクトがあり、それを中心にストーリーが広がりを見せる紙面。メリハリの付け方が上手く、それぞれの写真が引き立っているのが好印象である。祭りがテーマの応募作品は多いため陳腐になりがちだが、卓越している。（大石） ●「八王子まつり」の喧騒が聞こえて来る写真ですね。どの写真も丁寧に撮影されています。撮影されている顔が、どれも印象的な表情をしています。「広報はちおうじ」は写真を大切に、効果的に使用していますね。紙面上でも、メインとなる写真を中心に効果的にレイアウトされています。欲を言えば、下段中央のような動的な写真を増やすことで、躍動感のある更に紙面になると思います。（板橋）

第一席

区市町村名	足立区
広報紙名・掲載号	あだち広報 9月10日号
掲載意図	「千住」は足立区にある地名である。しかし、そんな千住の名前が付いた「千住ネギ」は2015年8月30日時点では足立区内ではほとんど作られていなかった。様々な理由で姿を消してしまった千住ネギを、改めて小学生達の手で育て、種を採り、次代へつなぐという取り組みを特集した紙面である。 種まきから翌年の種まきまでの1年を、場面ごとに紹介したいという意図から、組み写真の構成を選んだ。それぞれの場面で2～4点の写真をセレクトし、写真の間には明確な区切りは入れず、全体が広く・つながって見えるように意識した。写真の中に物撮りや寄りの写真、日誌の切抜きなどを数点混ぜ、見て飽きない構成を心がけている。 全体的な絵づくりとしては、「土臭さ」と「子どもの力強さ」をコンセプトにした。土いじりの経験が少ない子どもも多い中、たくさんの土が付いたネギを引き抜く姿は見た人を元気にさせ、次代へとつないでいく希望を感じさせてくれると思ったからである。 文章は、千住ネギの現状から始まり、次の学年への種の伝達までを追う形にした。時々子ども達の口から出た感想を入れることで、成長する千住ネギに期待を膨らませ、次第に生育に乗り気になっていく姿を表現できたと感じている。
審査委員コメント	●ストーリーがきちんと構成されたレイアウト。非常に練られた紙面という印象を受ける。写真としてはストロボの使い方が上手く、特にメイン写真の撮れ具合が良い。（大石） ●千住ネギと子供たち。元写真もそれぞれよく撮れていますね。紙面上では、引き抜いたネギを持つ子供さんを中心に、左右対称に写真を配置したバランスの良いレイアウトになっています。表紙の写真と連動して組み合わせられているのも好感が持てます。（板橋）

映像部門

- 総評 p. 3 6
- 最優秀作品紹介 p. 3 8
- 第一席作品紹介 p. 4 0
- 第二席作品紹介 p. 4 2

＜映像部門 総評＞

●関委員

地上波テレビ、YouTube、SNS用動画、デジタルサイネージ用、とメディアもものすごく多種になってきた。WEB動画も隆盛で地域ブランディングも流行のごとく溢れてきている。メディアによってその尺（時間）も違う。予算のかけ方も違う。トリッキーなチャレンジをして注目を図るもの、王道的に予算も尺もそれなりにかけたもの。そんな中でのコンクールの審査は年々難しくなる感がある。

宿命的に、関係者以外のそれほどの積極視聴を期待できないコンテンツだと考えると、ぼーっと見ていると何か引き込まれるとか、たまたま見たら最後まで見てしまったというような、何かしらの力を秘めた作品が印象に残る。引き込まれるものと、そこまでいかないものとの差は何か？テーマとリアリティと思った。

切実に伝えなくてはならない防災の具体的な対応策は、その住民でなくても必要性を感じた。築地市場の仲卸の方にスポットを当てたドキュメントは、取材当日の市場の成り行きに密着し、納得感があった。ほか、今の時代らしく定年後を生き方を模索する人々のユニークな活動。跡継ぎは無いと確定してしまった、やすりの目立て。ユニークな参加型のイベントを仕掛ける部分から企画し、リアルな盛り上がりやPV的にまとめたものなど。

レギュラーニュースとしてその時あったイベントを取材してお知らせするというミッションの作品は不利になるのは致し方ない。そのイベントの面白さに左右されてしまうから。

しかし、ふと思った。これらの映像制作者が、同じテーマ、同じ尺、同じ予算で、競い合ったらどうだろう。あるいはテーマ選びはそれぞれに違ってても良しとするとか。もちろん妄想だが、想像すると力量の違いが明確になりそう。自分だったらあのテーマ、どう料理するだろう？平凡な題材だけど視点の違いで面白くできそうだななどと考えてみるのもいい。そう考えるとレギュラーニュースだから、大体こんな感じ、とルーティーンにになってしまうのはもったいない。こんな普通のテーマなのに惹きつけられた、というようなものにも出会いたい。

＜映像部門 総評＞

●高橋委員

毎年このコンクールの番組（作品）を見続けていますが、レベルというか平均点が最近になって上がり続けているような気がしています。喜ばしいことだと思います。と言うのは、もう10年位前になるでしょうか、まだVHSカセットテープでの出品があった頃、年末から年初にかけて、この20を超える出品番組を採点のためとはいえ、全部見るのが大変苦痛であったことを今になって思い出すからです。どうして苦痛だったのか、それは単に年末年始の繁忙期に重なっていたり、おとそ気分には水を注したというだけではなく、その頃はそれぞれの番組のレベルの高低差が激しく、同じ基準で評価するのが非常に困難で、中には何で出品してきたのか分からないほど番組の体を成していないものも少なからずあったからだと覚えています。

その時期から見ると、今年は次の番組を再生するのが楽しみになるほどで、ここに集まった23番組はここ数年の中でもレベルが高いと確信しています。

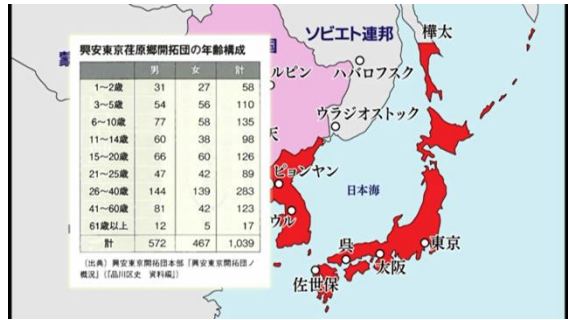
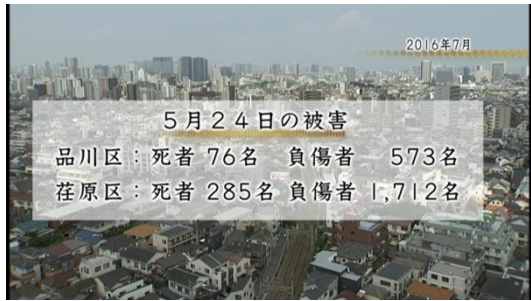
その理由としては、各番組、長尺も短尺も、まずテーマがはっきりしていて、制作者や行政の発したメッセージがストレートに伝わって来る、という事が挙げられると思います。その分、メッセージの内容の評価（批評）にまで踏み込むことができました。これは私にとっても大きな事です。次に、技術的レベルの高さです。CGや撮影機器等の進歩もあるでしょうが、編集のレベルが格段に上がっているのが目立っていました。やっと、全出品番組が同じ土俵で評価が出来るようになった、というのは言い過ぎかもしれませんが、私の実感でもあります。

具体的な採点や評価は各作品の講評を参照していただきたいのですが、今年の私の評価では70点台が一つも無い、ということが特徴です。これはわたし的には審査をして初めてのことなのです。しかも、80点台でも数年前なら90点台になるようなものもありましたので、各番組のレベルはかなり拮抗していたと思います。

最後に、言わずもがなのことを一つ。この何でも「情報はネット」時代に、こういった広報番組に求められるのは単なる「情報をお知らせする」だけではなく、そこに制作者の眼が感じられ、情報に人肌の温もりを感じさせなければならないと私は思っています。細かいことはネットで調べてください、ではなく、必要な情報は高齢者や子供にも届くような温かく完成度の高い番組をこれからも作って行きたいと思っています。制作の皆さん、お疲れさまでした。

最優秀（全国広報コンクール推薦）

区市町村名	品川区
題名	いま聞いておきたい！あの日の記憶 壊滅した商店街と満蒙開拓団
時間・制作方法	28分 委託制作
主な内容	東京の5大商店街として賑わっていた武蔵小山商店街は、物資統制により店を営むことが難しくなり、農業を経験したことのない商店主らは家族を伴い満蒙開拓団として満洲に渡った。開拓団1039人のうち約9割の方が現地で亡くなった、この「満州興安東京荏原郡開拓団」の生還者に話を伺った。
制作意図	再開発により大きく変貌し続けている品川の中に、都内でも有数の商店街として名をはせる武蔵小山商店街がある。戦時中、この商店街が、理事長を団長に開拓団として海を渡った事実は地元以外ではほとんど知られていない。 「今、話しておかなければ」という強い思いを抱く経験者たちの記憶を、区民に、多くの若者に伝え、後世に残す。
審査委員コメント	●武蔵小山商店街の悲惨な過去に焦点を当てる。戦時中、物資統制で存続不可能となった商店街の人々が国のためと満洲開拓団として海を渡ったことを知る人は極めて少ないであろう。農業もやったことのない千人以上の中のわずかな生き残りの人たちの貴重な生の声。とにかくいかなることがあっても「戦争はやっちゃいけない」という言葉に、レポーターとなった若い女性も涙をこらえきれなかった。（関） ●戦後70年を期して1年以上の制作期間をかけた貴重なインタビュードキュメント。東京・品川も城南大空襲で多くの民家が焼失した。武蔵小山商店街の店主たちは物資統制で商売が出来なくなり、食糧の確保のために家族を伴い1039名で満蒙開拓団として海を渡った。農業の経験がない事に併せて、過酷な自然と匪賊の被害での苦労は筆舌尽くし難いものがあったという。敗戦後、ソ連参戦による引揚げ中の惨状は目を覆わんばかりで、番組インタビュアーももらい泣きするほどであった。結局、生きて帰れた者は1039人のうち1割程度であった…「戦争は絶対にやっちゃあいかん！」これが生存者共通の叫びであり、不戦の誓いでもある。（高橋）



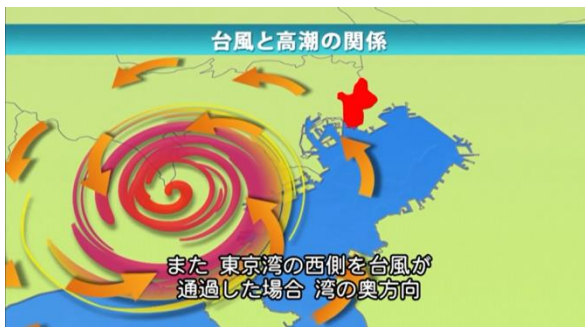
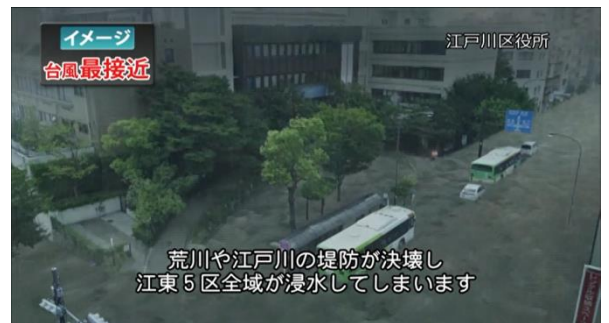
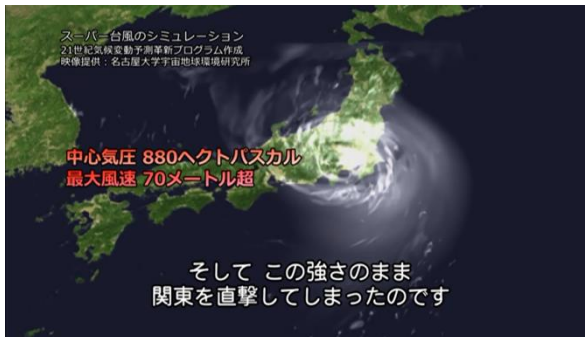
第一席

区市町村名	豊島区
題名	THE としま遺産 3つの国重要文化財
時間・制作方法	20分 委託制作
主な内容	豊島区の国の重要文化財である豊島長崎の富士塚（昭和54年指定）と自由学園明日館（平成9年指定）、平成28年に指定された鬼子母神堂をそれぞれ紹介する。豊島長崎の富士塚については、富士山信仰と成り立ち、富士塚の山開きを紹介。自由学園明日館については、自由学園成り立ちの時代背景や建築物として優れた明日館の魅力、明日館で行われている「動態保存」について紹介。鬼子母神堂については、国の重要文化財指定を受けての報告会の様子や、御会式など地域のコミュニティー活動のイベント、建築様式の紹介を行う。
制作意図	豊島区内の重要文化財である豊島長崎の富士塚と自由学園明日館、鬼子母神堂をそれぞれ紹介し、文化財について改めてその魅力を伝える。今年度区内の重要文化財を取り上げたのは、鬼子母神堂が平成28年の7月25日に国の有形重要文化財に正式に指定され、注目を集めた。新しく指定された鬼子母神堂の建物や装飾、地域との催事を紹介するとともに、豊島長崎の富士塚と自由学園明日館という二つの重要文化財も振り返ることで、豊島区の地域性や受け継がれている歴史の魅力を改めて伝えようとするものである。
審査委員コメント	●区内の鬼子母神堂が最近、新たに国の重要文化財の指定を受けたことをきっかけに『THE としま遺産』と銘打って区内の3つの国の重要文化財を紹介する。全国レベルでも世界遺産に登録されると、俄然観光スポットとして脚光を浴びることから、自治体としても、せっかくの指定を内外に知らしめる必要は十分にある。指定時期が古く忘れられがちな2つのスポットもこうして丁寧に解説することで再び大きな価値を感じることができる。（関） ●豊島区の国の重要文化財である「豊島長崎の富士塚」、「自由学園明日館」、「鬼子母神堂」のそれぞれの歴史、由来、その意義などを情報的にも必要且つ十分に紹介している。素晴らしいのは各重文が地域地元の人達にとけこみ、現在まで受け継がれているというその姿である。「動態保存」という言葉は公開しながら保存する、という意味で「自由学園明日館」の場面で使われていたが、その意味ではこの三つの重文は全て動態保存だとも言えるのではないだろうか。そして、もう一つ特筆すべきは安定した移動ショットを要所要所に使った映像の美しさである。切れの良い編集、効果音やNRも質が高く、文化財の価値を更に高めているように思えた。（高橋）



第二席

区市町村名	江戸川区
題名	えどがわ区民ニュース 平成28年9月号特集 「巨大台風の脅威に備える ～江東5区大規模水害避難等対応方針～」
時間・制作方法	22分 委託制作
主な内容	近年、集中豪雨による水害が数多く報じられ、地球温暖化によってスーパー台風が本州を直撃する可能性も論じられるようになった。 その結果起こりうる大規模水害に対し、昨年江戸川区と同じく低地帯に大人口を抱える江東5区が集い検討を始めた手法は「広域避難」。 なぜ、過去例のない避難手法の検討が必要なのか、現実にはスーパー台風が最悪のコースで直撃するシミュレーションの存在を明らかにし、その時何が起こるのか、浸水域内の人口250万人の安全を守るためどのような準備が必要になるのか、専門家の意見を交え、検討内容を紐解いていく。
制作意図	平成27年8月24日に開催された、江東5区大規模水害対策協議会が「広域避難」実施を目指すと発表したことは、マスコミ各社でも広く報じられました。この取り組みを紹介するにあたり意図したことは、 1、前例のない取り組みであり必要性をわかりやすく伝えること、 2、話題が旬のうちに放送することです。 1については、専門家の解説、スーパー台風の映像借用など海外を含め各方面と交渉を重ねながらリアリティのある素材を揃え、理解を促すためCGも試行錯誤しながら作成しました。 また2については、24日の取材は分量があり、これを織り込み複数の内部試写・MA・9月1日放映とこなすのはタイトでしたが、どうしても防災の話題が盛り上がる9月1日に間に合わせ、先進的な区の取り組みを伝えたいと考えました。 わかりやすく、タイムリーであることは当たり前ですが、この番組でも丁寧に実現できたのではと感じています。
審査委員コメント	●近年の海外のスーパー台風の凄まじい映像から、もし江戸川区がこのような事態に陥ったら…と、区の対策を紐解いていく。専門家の意見を随所に交え過去に例のない広域避難のシミュレーションの必要を説く。時間差の避難、多方面への避難など、パニックを避ける予備知識はいざという時役にたつ。東日本大震災の津波の例もあり、地域の大規模水害の危険性を明らかにし、自治体、住民の意識をあわせて災害に備えることの重要性を強く感じる。（関） ●海抜ゼロメートル地帯が多い江東5区が、スーパー台風などの上陸に備えて共同でとった避難方針は「広域避難」の実施。千葉県や埼玉県にも及ぶ広域避難は過去にその前例が無く、その有効性は完全に立証されたものではないが、他の方法は無いのである。スーパー台風の直撃コースをシュミレーションし検証すると、先行避難→広域避難という2段階の避難が有効だという。更に一度に大勢が避難するのを避けるために、専門家は5区合せて250万人の内100万人位は現場に高所避難などで留まる必要があるともいう。この様な避難方法が現実的かどうかはこれからも検証していく必要があるだろうが、この番組ではCG等映像効果も良く考えられており、喫緊の課題に分かりやすく的確に答えようという意気込みがうかがえた。（高橋）



第二席

区市町村名	日野市
題名	日野市文化財シリーズ『刀剣』
時間・制作方法	14分 自主制作
主な内容	・日野市の文化財に、新選組副長の土方歳三が愛用した日本刀「和泉守兼定（いずみのかみかねさだ）」があります。今回は一般的な日本刀の説明を行ってから、和泉守兼定について解説しました。 ・前半は日本刀の種類と、制作工程を紹介しました。材料の良い砂鉄が市内の浅川から採取されること。近くに刀匠がいたことは新たな発見でした。後半は、資料館に大切に保管されている兼定だけでなく、市内で有名な他の2振りの日本刀も一緒に紹介しました。
制作意図	・日野市の保有する全ての指定文化財を紹介したものは、現在まで白黒の写真を掲載した書籍のみでした。しかも20年以上前に作成されたものでした。そこで新たに企画されたのが「映像（動画）」による文化財の紹介です。 ・完成した映像は市のホームページに掲載しました。これによって、市民をはじめとして誰もが自由に視聴できるようになり、シティセールス（情報発信）のひとつの役割を果たしています。
審査委員コメント	●20年前に白黒写真の書籍のみであった市の指定文化財を動画にする試み。今回は「刀剣」の種類、制作工程、を解説。土方歳三記念館の文化財「和泉守兼定」他2振りを紹介する。近年刀剣ブームでもあり日野市ならではの情報発信となっている。幅広い人たちにアピールするため親しみやすくしているのだと思うが、音楽がやや軽い印象で、もう少しテーマにあっていると良かった。日本刀の鬼気迫る迫力みたいなものを感じたい気がする。（関） ●日野市の文化財の一つに新選組副長土方歳三が愛用した日本刀「和泉守兼定」がある。この番組では一般的な日本刀の製造工程の紹介と、「和泉守兼定」他二振りの刀の解説を詳しく行っている。まず驚くのが地元浅川の川の水から採取する選良な砂鉄を使って基礎鋼を作る工程である。実は刀剣づくりは昔からの日野の地場産業なのである。鉄を打ち、形を整えていき、最後に美しい刀紋が浮かび上がる。日本刀初心者にも興味を持てるような易しい構成だが、導入の日本刀の種類の説明、名刀と謳われる由来なども興味を惹き、的確な説明NRとマクロ撮影も含めた全体の映像が美しく、保存用動画としての完成度は高い。（高橋）

